

げんき カエル



こども病院
ニュースレター



平成 28 年(2016) 1 月 1 日

新しいこども病院に魂を入れる



病院長 長嶋 達也



新年あけましておめでとうございます。新しい年が皆様にとって平和で実り多い年となりますことを、心よりお祈り申し上げます。年の初めに当たり、兵庫県立こども病院に期待を寄せ、見守り応援して下さるすべての皆様に感謝申し上げます。

新病院の建築は予定通り進み、この「げんきカエル」が皆様のお手元に届くころには竣工を迎えていることと思います。これから新病院運営のリハーサルを繰り返し、最後に人工呼吸器が必要な小さな赤ちゃん達の引っ越しという大仕事まで残すところわずかになりました。

私たちの本当の仕事、「新しい病院に魂を入れる」ことは引っ越しの後に始まります。少子化時代の要請にこたえる新しいこども病院の機能は何かということが問われています。総合周産期母子医療センターの整備が進み、兵庫県では4センターとなり、そのうち3つのセンターが神戸市内に近接して存在するという環境の中で、こども病院の果たすべき役割にも変化が凝けられませんが、新病院には屋上ヘリポートも設置され、三次救急患者をより広範な地域から受け入れる体制を整備します。こども病院における医療を必要とする救急患児を、必ず受け止めることのできる体制を確立

します。小児がん医療センターは、国の政策として指定された「小児がん拠点病院」の一つとして重要な役割が期待されています。近畿圏には5つの小児がん拠点病院があり、最も密度の高い地域になります。それぞれの拠点病院に特徴ある治療の確立が求められています。全国屈指の治療経験のもとに高いレベルの治療を続けるとともに、2017年開設予定の新陽子線治療センターにおける小児がんの治療により、日本全体の小児がんの治療水準向上に寄与することを目指しています。

小児心臓センターを開設して間もなく2年になりますが、心臓手術の件数も増加し、成人先天性心疾患の診療体制も整いつつあります。質の高い外科的治療を提供するために、内視鏡手術、ナビゲーション手術、カテーテル治療など最新の機能を有する手術室の整備と集中治療部門のマンパワー充実を進めています。年間4000件の全身麻酔を可能とする充実した麻酔科に支えられて、わが国における小児疾患の外科的治療をリードしてまいります。

私たちの第1の使命は「治す」ことであり、「治せるものは必ず治す」ことに全力を傾けます。しかし、いかに進歩した医学をもってしてもすべての病気を「治す」ことができるわけではなく、むしろ、「治らない」病気のこども達を受け入れることが私たちの使命でさえあります。新病院では在宅医療支援病棟を整備し、「治す」と「支える」ことをこども病院の両輪としてまいります。

こども病院は、多くの方々温かい支援を得ることにより初めてその力を発揮いたします。本年も引き続きご支援くださるようお願いいたします。「一花開天下春」、皆様のご健勝をお祈りいたします。



第1回「親と子の腎臓病教室」を開催 —移行期医療を考える—



8月8日(土)に当院通院中のネフローゼ症候群の子供たち(学童以上)とその親を対象に「親と子の腎臓病教室」を初めて開催しました。小児期医療から成人期医療への移行に関しては多くの科で問題となっています。今回移行期医療をスムーズにすすめるためにはどうすればよいかという看護師との話し合いの中で、本教室開催が実現しました。事前に患者さんや保護者に、疾患に対する理解度や生活に関したアンケート調査を行い、教室のプログラムを考えました。当日は10名の子供たちと15名の保護者の参加がありました。

前半1時間で、腎臓内科の医師(神田、中川、白鳥)により、「ネフローゼ症候群ってどんな病気?」、愛甲薬剤師により「知ってこ 自分の薬」、鳥井管理栄養士により「もしかして・・・その症状、食事に関係しているかも」という題でお話しをしました(写真1)。後半1時間で、子供たちには、「ネフローゼ症候群クイズ大会」、「医師、薬剤師、栄養士に知りたいこと聞こう」、腹部エコーを使って実際自分の腎臓を見たり、自分の血圧を測定したりする体験コーナーを設けました。保護者には、栗林看護師より「病気と一緒に大人になるには」という題でお話しをし、その後グループに分かれて、看護師スタッフが入り保護者同志でこれまでの経験を話し合っていました。最後に参加した子供たちひとりひとりに修了書を渡しました。

腎臓内科部長 田中 亮二郎

今回の腎臓病教室には、多職種17名のスタッフが参加し、普段の診療では難しい患者・保護者同志、患者・保護者と医療者のコミュニケーションを図ることもできました。この腎臓病教室が、子供たちが自分で考え、行動できる大人になることの手助けとなればと考えています。次は腎炎の子供たちに、第2回親と子の腎臓病教室を予定しています。



写真1





診療科案内（整形外科）

整形外科部長 小林 大介

Q1：整形外科ってどんな病気を治していますか？

A1：整形外科では先天性股関節脱臼、先天性内反足、筋性斜頸といういわゆる小児整形外科3大疾患といわれる疾患に加え多合趾（指）症、腭骨列形成不全などの先天性奇形、二分脊椎、脳性まひに合併する麻痺性疾患、ペルテス病、大腿骨頭すべり症などの股関節疾患、O脚、X脚などの下肢アライメント疾患、側弯症などの脊椎疾患など多岐にわたる疾患を治療対象としています。もちろん骨折などの外傷性疾患も対応します。年間の手術件数はおおよそ280件です。

Q2：こどもの整形外科の病気は大人とは違うんですか？

A1：大人の整形外科の場合、外傷を除けばほとんどが加齢による変性疾患（変形性関節症、変形性脊椎症など）です。一方こどもの場合は先天的な要因に加え後天的な要因である成長が絡んできます。またさらにこれに発達という要素も加わってきます。先天性の疾患では経過が良いと思っても時間とともに悪化することもあり

ます。一方で著明な変形が自然経過で改善していくこともしばしばあります。小児整形外科疾患を診るにはそれぞれの疾患についての専門の知識が必要です。

Q3：実際どんなふうの治療するの？

A3：先天性内反足を例に挙げます。この疾患は生下時より著明な足部の変形を認める疾患です（図1）。僕たちはこの変形に対し可及的早期にギプスによる矯正を行います。ギプス巻きは外来で対応可能です。1週間に1回約6週間かけて徐々に変形を矯正します（図2）。約6回のギプスで矯正を行った後、日帰り手術でアキレス腱の切腱を行いギプス固定を3週間行います。その後foot abduction braceという装具を装着しつかまり立ちを始めるまでは1日23時間、その後は夜間のみ装着とし4歳まで続けます。この方法はPonseti法といい内反足治療のスタンダードな方法となっています。小児疾患はこのようにシステミックに治療していくことが重要です。



図1 先天性内反足の患児

左先天性内反足 足部の内反、内転、尖足、凹足が認められる。



図2 ギプス巻き

足部変形を徐々に矯正する。膝上からまくのが重要。



子ども病院での思い出

嘱託職員 竹中 修



子ども病院が開院したのは昭和45年5月、折しも私が新人の診療X線技師として歩み始めた年でした。ご覧の航空写真は「須磨区高倉台1-1-1」を象徴する開院当時のもので、高倉台の岩山を削り開拓された土地を海に見立てると、病院が船出をしているかの様な眺めとなっています。

放射線部門は、放射線科医師1名・看護師3名・受付1名・X線技師6名（現在は診療放射線技師15名）でのスタートでした。現在と比べるとモダリティの種類も少なく一般撮影装置・断層撮影装置・X線テレビ・アンギオ装置という稼働状況でした。



一般撮影装置では、単相装置が主流でX線の出力が不安定になるため撮影条件の選択に苦勞し、ポータブル装置は、撮影時間の設定がぜんまい式タイマーであったこと、昭和56年に導入されたX線CTは、当時の最新機種で1枚のスライス画像を取得するまで9秒（現在は0.5秒未満）近くか

かっていたこともあり、患児の固定補助具の作成や動きに対する対策が課題となっていました。放射線検査のための固定具・補助具のアイデアを求め同僚と他施設への見学に行き、試行錯誤に明け暮れた日々は、良き思い出となっています。また県職員退職後にも再任用・嘱託職員として、病院移転という時代の節目まで子ども医療に携われたことを感慨深く感じています。



Concept コンセプト

● **基本理念** 周産期・小児医療の総合施設として、母と子どもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になって子どもたちの健やかな成長を目指します。

- **基本方針**
1. 患者の権利を尊重した医療の実践
 2. 安全・安心と信頼の医療の遂行
 3. 高度に専門化されたチーム医療の推進
 4. 地域の医療・保健・福祉・教育機関との連携
 5. 親と子どもが一体となった治療の推進
 6. 子どもへの愛とまことに満ちた医療人の育成
 7. 医療ボランティアとの協働による患者サービスの向上
 8. 継続的な高度専門医療提供のための経営の効率化



編集後記

須磨の地で迎える最後の2016年が明けました。高倉山を削って埋め立てられた土地への移転であることを伝え聞き、興味深いものがあります。気分を新たに!!! 「げんきカエル」では1びよん（一歩）ずつ情報発信していきたいと思ひます。

編集委員長：橋本ひとみ

編集委員：大津雅秀 大西美樹
酒田米紀 山本正子
沼田憲作 坂本有里恵
廣岡繁宏 福本宏文

本誌に関するご感想・ご希望・ご質問はこちらまで



兵庫県立子ども病院

周産期医療センター 小児救急医療センター
小児がん医療センター 小児心臓センター

〒654-0081 神戸市須磨区高倉台1丁目1-1
TEL 078-732-6961
FAX 078-735-0910 (総務課)
FAX 078-732-6990 (予約センター)
URL 情報 / www.hyogo-hosp.com/
E-mail: info_kchil@pref.hyogo.jp